静嘉堂

静嘉堂研究紀要

創刊号

『静嘉堂研究紀要』創刊の辞

ここに『静嘉堂研究紀要』を創刊する。静嘉堂文庫は明治二十五年（一八九二）、三菱第二代社長・岩崎彌之助により、駿河台にあった私邸に設立された。この設立については、正伝である〈岩崎彌太郎岩崎彌之助〉伝記編纂会編『岩崎彌之助伝』（一九七一年）によるところである。彌之助は若き日、漢学者・重野成斎（安繹）の私塾・成達書院に学んで教えを受け、後年尊敬して止まなかった師を文庫長として迎えた。

これに先んじて彌之助は日本東洋の美術に関心を高めたが、その優秀なるものが海外に流出する情況を座視し得ず、みずから蒐集を開始した。やがて彌之助はそのコレクションを秘すことなく、広く公開して近代国家に生きる人々のアイデンティティを高め、美意識を洗練させることを希求するようになった。一丁倫敦（ロンドン）とたたえられることになる東京丸の内に美術館を開設することを決意し、日本近代建築の父とオマージュを捧げられるジョサイア・コンドルに依頼し、設計図まで引いてもらっていたのである。

明治四十一年（一九〇八）彌之助が逝去すると、その跡を継いだ小彌太が父のコレクションを整理し、拡充し、公開すべく、数多くの計画を立てて実行に移していった。彌之助三回忌の明治四十三年（一九一〇）、東京郊外の北多摩郡砧村（現、世田谷区岡本）にコンドル設計の霊廟を建立すると、十七回忌の大正十三年（一九二四）、霊廟と同じ敷地にコンドルに学んだ桜井小太郎の設計になるイギリス風洋館と書庫を建てて静嘉堂文庫をここに移し、またのちには美術品の鑑賞室を併設したのである。小彌太は父彌之助が眠る霊廟の近くにこれを置きたかったにちがいない。

この鑑賞室はおもに研究者のために用いられ、昭和五十二年（一九七七）からは「静嘉堂文庫展示館」として一般にも公開されることになったが、文字通り鑑賞室であった。そこで平成四年（一九九二）、静嘉堂文庫創設百周年を記念して、鑑賞室に隣接して静嘉堂文庫美術館を開設した。そこは武蔵野の面影を残す素晴らしい環境ではあったが、彌之助・小彌太二代にわたって蒐集された日本東洋の名宝至宝を、より一層多くの方々に鑑賞していただきたいという思いが、私たちの胸から消えることはなかった。

令和二年（二〇二〇）は、岩崎彌太郎の三菱の前身となる九十九商会が大阪に設立されてから節目の百五十年にあたっていた。その記念事業として、丸の内の明治生命館に静嘉堂文庫美術館のギャラリーを移すプロジェクトが立ち上がった。明治生命館は昭和九年（一九三四）、東京美術学校教授であった建築家・岡田信一郎が設計したルネッサンス様式の建築である。昭和時代の建造物としては最初に重要文化財に指定されたもので、もはやこれ自体が美術に昇華している。しかもこれは、三菱二号館の跡地に建てられたという奇しき縁を有している。丸の内に美術館を開設

したいという彌之助の夢が実現することにもなる。関係者一同、一致協力し開館に向けて邁進したことは改めて言うまでもない。

彌之助が静嘉堂文庫を駿河台に開設してからちょうど百三十年目にあたる令和四年（二〇二二）の十月一日、いよいよ静嘉堂文庫美術館丸の内ギャラリー、愛称「静嘉堂@丸の内」が開館、三部にわけた開館記念展が開催された。より多くの方々に鑑賞していただきたいという私たちの願いは現実のものとなったのである。

この静嘉堂文庫美術館丸の内ギャラリー開館に併せて、『静嘉堂研究紀要』を編集発行することとした。これまで静嘉堂は、『静嘉堂鑑賞』『静嘉堂宝鑑』『静嘉堂文庫宋元版図録』などの書籍を出版し、展覧会にちなむカタログを編んできたが、あえて紀要は作ってこなかった。研究の成果はそれらに充分反映されてきたからだが、これまでを一新する歴史の第一歩を踏み出すのを機に、展示および研究においても新しい地平を拓く決意のもと、紀要を編集し公にすることにした。

かつて美術館における展示は研究の成果を発表するものと考えられ、紀要も同じように見なされていた節が強い。しかし私たちは、展示と研究は表裏一体をなし、車の両輪のようなものであると考えて紀要を編むことにした。研究によって展示は充実し、展示によって研究は進展するからである。

もし両者が分断されてしまえば、美術作品を保存管理展示する美術館が一過性の見世物と化し、人類の歴史と生活空間に対する理解を誤らせてしまう。もし両者が乖離してしまえば、美術作品という基底の上に成立する美術史学は存在価値を喪失する。展示と研究が分かちがたく結び合わされることによって、美しい美術の世界が誕生するとともに、美術館と美術史学がそれぞれ発展することにもなるのである。展示と研究を合体させる接着剤として、あるいは両者を融合させる触媒として、必要にして不可欠なのが紀要にほかならない。

このような観点に立って、私たちは新たに紀要を編集し公にすることにした。したがって美術史的研究と博物館学的研究を含みつつ、それに限定されることなく、静嘉堂に関するさまざまな情報を盛り込み、発信していきたいと祈念している。一言でいって、静嘉堂をよりよい美術館、研究施設にするためである。

フランス・ポンピドー国立芸術文化センターの初代館長・ポントゥス・フルテンは、「美術館は生命を爆発させるところだ。そこは生き生きとした空間であり、墓場のモニュマンとしてはならない。美術館は近代都市において最後にたどりつく場所であり、そこは同時に視覚的に大きく凝縮したところである」と規定している。近代都市東京の中心である丸の内に開館した静嘉堂文庫美術館丸の内ギャラリーが、そのようなエネルギーあふれる美術館に発展するべく、私たちはここに『静嘉堂研究紀要』を創刊する。

令和五年三月

静嘉堂文庫美術館　館長　河野　元昭

目次

『静嘉堂研究紀要』創刊の辞　河野元昭 ―― 2
口絵 ―― 5
岩崎彌之助と静嘉堂文庫初代文庫長・重野成斎　河野元昭 ―― 9
平福百穂《鴨》の制作背景と評価　浦木賢治 ―― 16
《山水人物螺鈿衝立》（館蔵）について―琉球螺鈿としての特質と修理から得た新知見　小池富雄 ―― 27
『静嘉堂研究紀要』要綱 ―― 36

口絵１　平福百穂《鴨》

口絵２　《山水人物螺鈿衝立》　全景

口絵３　同衝立　表

口絵４　同衝立　裏